

展示会
「北欧からのおくりもの 子どもの本のあゆみ」
関連講演会

「ノルウェーの子どもの本の歴史」 (要旨)

平成18年11月9日
講師：ノルウェー児童書研究所長
カーリン・ベアテ・ボル氏

今回、国立国会図書館ならびに国際子ども図書館にお招きを頂き大変光栄に、かつうれしく感じております。私からはお招きを受けたお返しとして、歴史的な観点から見た児童文学の世界に皆様をご案内したいと思います。また、最近の文学についても、一般的な傾向をハイライトというかたちでご紹介をさせていただきたく思っております。

これまで30年ほどの間、私は児童文学のいろいろな分野で仕事をしてまいりました。大学や、評論家としての仕事、あるいは出版社の編集の仕事にも携わりました。また、この20年間はノルウェー児童書研究所の所長を務めております。

ノルウェーは言語共同体としては小さな国で、約440万人の住民が住んでいます。400年にわたりデンマークの統治下にありました。1814年からスウェーデンと連合を結び、1905年にスウェーデンから独立したため、国家としては100年を経過したに過ぎません。ノルウェーはこのように新しい国ではありますが、児童文学を育み国際的な評価を受けてきました。

ノルウェーで最初の児童書『子どもたちのた

めの小冊子』(*Lommebog for Børn*)が出版されたのは1798年のことです。200年にわたるノルウェーの児童書の歴史は、教訓的かつ啓蒙的な文学に根ざしており、1800年代中頃によく児童文学が生まれました。

ヨルゲン・モーは、1851年に子どもの本『井戸の中、池の中 - 子どものための小さなお話』(*I brønden og i kjæret: Smaa historier for børn*)を出版しています。彼はノルウェーで遊ぶ生き生きとした子どもたちを描き、子どもの視点から物語を語りました。当時文章で使用しているノルウェー語より、より話し言葉に近い言葉が使用されています。

19世紀末から20世紀への変り目の時代は古典的なノルウェーの児童文学の「黄金期」と呼ばれました。19世紀終盤の若い世代の作家たちは、教訓的な伝統から脱却したのです。ディッケン・スヴィルグメイエルとハンス・オーンルーは、ノルウェーの小さな町や地方における子どもの日常生活を描きました。「黄金期」の文学の多くには、ノルウェーの地方で人々が苦しい生活の中でかろうじて生計を立てるために奮闘するといったモチーフがあります。

ノルウェーの絵本は、新しい印刷・複製技術のおかげで19世紀末に躍進を遂げました。優れた作家は最もふさわしい挿絵画家を見つけようとし、「ノルウェーの児童書は高い芸術性を持つべき」という基準が確立されました。

ノルウェー語の書き言葉や話し言葉を発達させる必要性も、児童文学発展のための重要な要素でした。児童文学は、国のアイデンティティを形づくるための手段としても扱われました。

20世紀への変り目頃からの児童文学に見られる特徴は、多くの著名な作家が子どもと大人

の両者に向けて作品を書いたということでした。実際、作家が子どもと大人という二つの領域を行き来する現象は、その後もノルウェーの文学の特徴となっています。

20世紀後半、児童文学の近代化にとってきわめて重要な動きがありました。

第1は、1950年代、作家やストーリーテラーがノルウェーのラジオ局との提携に乗り出したことです。当時ラジオはノルウェーのどの家庭にも普及しており、特に幼児向け文学の活性化をもたらしました。ストーリーテリングと小さな子どものための読み聞かせや歌の活性化を図ったのは、『ハッケバッケのゆかいな動物』のトルビョルン・エグネル、『スプーンおばさん』のアルフ・プリヨイセン、『アウローラ』のアンネ＝カット・ヴェストリの3人でした。彼らは音楽的才能や演劇の経験を生かし、ノルウェーの国営放送のチャンネルを通じ、絶大な影響を与えました。

第2は、1970年代から80年代にかけて、大人の文学で見られた社会を批判する動きが児童文学の世界にも入り込んできたことです。これまでタブーとされていた政治的課題、思春期や性的関心に関する話題も受け入れられ、若者のための文学は新しい生命を与えられました。

児童文学で起こった第3の現象は、実験的でユーモアあふれる言葉の遊びなどが取り入れられた子どもの詩でした。インゲル・ハーゲルuppは詩集『わあすごい』(1982)で1950年以來の、現代の子どものための詩作を集大成し、広くその業績が認められています。

1970年代の政治的な風を受けて、大学などで、学生たちの関心はこれまでの正統派の文学から違うものへと移っていき、女流作家による文学、

労働者階級の文学、大衆文学、そして児童文学が新たな研究対象となり学術分野としても認められていきました。

1970年に出された子どもの本はわずか100冊に過ぎませんでしたが、1980年にはそれが250冊にもなっていたのです。そして、こうした流れのなか1979年、ノルウェー児童書研究所が設立されました。

ノルウェーのような小さな言語圏の国にとって、自国の文学を守ることは非常に大切なことです。海外からの翻訳本の山に、自国の文学、特に児童文学は埋もれてしまうおそれがあるため、1978年から政府買上げプログラムによって、大人のための創作と同様、児童文学の出版社と作家に良い条件が与えられることになりました。新たな成長のための政府買上げプログラムでは、国がその年に出版された新しいオリジナルのノルウェーの本およそ1,500部を買い取ることが保証されています(通常の出版部数は、2,500~3,000部)。買い上げた本はノルウェー国内の図書館や学校の図書館に配布されることになっています。

1970年代初期に、児童文学に対し新たな挑戦をする熱意あふれる作家たちが現れました。エイナル・エークラン、トール・オーゲ・プリングスヴァール、トールモー・ハウゲン、ルーネ・ベルスヴィク、ファム・エークマン、ラグナル・ホヴランの6人です。

トールモー・ハウゲンは、理解のない大人に囲まれた子どものジレンマ、あるいは孤独や不安と戦う子どもたちを描き、70年代初期に突出した位置を得ました。彼は1975年に書いた子どものための新しい小説『夜の鳥』(Nattfuglene)などで自身のテーマをより深く追求しました。

ルーネ・ベルスヴィクは70年代末にデビューし、寓話とナンセンスのユニークな組合せで、小さい動物と想像上の生き物が住む流れのそばの小さな国の出来事を描きました。ノルウェーのトーヴェ・ヤンソンというべき人です。

ファム・エークマンは画家、作家として独立独歩を貫いた芸術家です。エークマンの文章や挿絵には、われわれの潜在意識にまで扉を開放する、革新的で質の高い物語性があります。

子どもやヤングアダルト向けの小説は1970年代、1980年代に大きな進展があり、ダイナミックで多様なものが生まれ現在に至っています。これに対抗したもののひとつとして社会批評型のスリラー小説が、大衆文学と競争していく上で数々の有能な人材を輩出することとなりました。

子どもやヤングアダルト向けの本、探偵ものや、冒険小説などにも歴史的なテーマが描かれています。小説の分野では、子ども向けと大人向けの双方を手がける作家が多くの作品を出しています。ノルウェーの作品では1970年代より現在に至るまで、社会批判よりむしろ個人に焦点をあて自らの存在や性のアイデンティティを模索する若者をテーマとしたものが、女性と男性両方の作家によって取り上げられており、ベージェ、アイデ、フレットハイム、クヌートセン、オスラン、シェーンらは、新しいヤングアダルト文学の代表的作家です。シェーンの『月の精』は日本語にも翻訳されました。

6人目の作家、ラグナル・ホヴランの作品は児童文学のより伝統的な基準から脱却し、見捨てられた子どもたちや子ども時代の喪失を主要なテーマとしています。こうした本の中で、子どもたちはどこかで自分たちの場所を見つけて行くことを示唆する内容になっています。

90年代になると、若者向けの文学に一種のノスタルジーが取り込まれるようになりました。多くの男性作家が思春期の初め頃を、暖かいユーモアを込めて描き、大人をも引きつけました。代表的な作品としてクラウス・ハーゲルuppの『マルクスとディアナ』そして、アルネ・ベルグレンの『魚』があります。

また、長い間多くの少年向け文学の基盤をなしてきた、男性的で勝利をおさめるヒーロー像の概念は、この10年で疑問視されるようになりました。男性の持つアンビバレンスさが描かれるようになり、今や若者向けではアンチ・ヒーロー的なものが主流となってきつつあります。同時に、若手女流作家の本には、より複雑で強い女の子が登場するようになりました。ヒルデ・ハーゲルupp、ラグフリッド・トロハウグが代表的な作家です。

ノルウェーでの子どもあるいは若者向けの本の多様性を語る際、創作性の高いお話に加え商業的なシリーズの存在があり、両者は常に共存してきました。しかし、ここ数年においてはイージー・リーディングといわれ簡単に読める本の種類が非常に増えてきています。また近年の国際的な学力テストにおいて、ノルウェーでは読む能力が子どもたちや若者の間で非常に低いという現象があり、政府では2003年から2007年にかけて子どもたちに読書を奨励するためのさまざまな方策をとり、そのための投資を行っています。政府による買上げ制度はもともとノルウェーのフィクション分野における健全な発達を促すものでしたが、90年代にはこの制度がさらに拡大して、特に子どものためのノンフィクション分野も適用範囲に入れられました。このためノルウェーの文学はノンフィクション分野で海外でも高い評価を受けるようになりまし

た。そしてノンフィクション分野では、事実とフィクションを結合して“Faction”を作ろうとする傾向が生まれました。ヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』は、子どもたちと若者のために哲学をフィクションの形で伝えたものでしたが、国際的な人気を得てノルウェーの児童文学史上最大の成功を収めました。『ソフィーの世界』はこれまで54の言語に翻訳され、1,500万部が売られています。これはジャンル同士の融合を可能とした文化的政策の賜物であるといわれています。

1990年に、トールモー・ハウゲンは国際アンデルセン賞を受賞しました。1年後に、ヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』は、数多くの文学賞を総なめにし、記録的な売り上げ数をあげました。ノルウェーで起こったこの2つの出来事は、世界的な文学地図上で際立っています。ノルウェーの児童文学は、文化的輸出品となったのです。

ノルウェーの最近の児童文学は、子どもと大人の両方に楽しめるものになったため、子どものための特別な作品といった位置付けを失っていると批判する声もあります。またこれまでの伝統的な子どもの本といわれていたジャンル、特に男の子、女の子、それぞれを対象にした本の復帰を求める声が増えています。これは先生、親、図書館員がこうした本を求めているからだけではありません。特に子どもたちのなかでも男の子の本離れが進んでいるために、アクションがたくさん詰まった男の子のための文学を求める声が高まっていることがあげられます。しかしながら、こうした流れがあったからといってノルウェーの児童文学の地位が揺らぐことはありません。私たちは多様なジャンルの児童文

学を提供できるからです。そうしたことからこれまでどおり伝統的な本が、もう少し新たなチャレンジを持った文学とともにきちんと共存していけるということを、私たちは確信しているからです。

ノルウェーでは現在のところ、1年当たり700冊ほどの児童書が新たに出版されています。私は児童文学に対する理解を深めること、その歴史、独自性、多様性、そうしたものが、公共の場、学校、図書館で理解されることで、文学のステータスをあげることが出来ると考えています。そして、長期的には作者自身が自分たちの作品の理解を深めることに繋がっていくと思います。こうしたことによって、よりすばらしい文学が生まれ児童の文学に対する新たな可能性を探るダイナミズムにも繋がっていくと思います。また児童文学が停滞したり、あるいは進歩が止まったりすることがないようにしていきたいと思います。そうすることで、今日のノルウェーにあるような非常に芸術的な媒体として児童文学が存在し続けられるのだと思っています。ご清聴ありがとうございました。